ませう。」
「だつて、母様は、いま少し、いま少しつて、一日かかつちまうんだもの、ねえ、母様てば、母様」
あなたは少し考へて
「もう縫はなくつてもいいのよ」
「もういいつて？　この兒は」と母様はお笑ひなすつた。あなたも笑つた。
後にあなたは、
「母様とは私の面倒を見て下さつて、私を可愛がつて、そして、いま少し、もう少しつて――終日――縫物をして居る人です」
と人人に話してきかせたのでした。さうすると、その人達は、母様が子供達の面倒を見て下さるからには、子供達もまた母様の爲にしてあげなけれ

ばなりません。とあなたに話しました。そして、あなたは實にその言葉の通りにやつた。母様のまへに立塞つて、あなたは勇ましく拳を握りしめた。
「私の母様に觸つちやいけません！」
あなたの唇はわななき、眼は怒と涙で輝いて居た。けれども、母様はあなたをかばいながら、
「パパさんは、串談なんですよ」母様はあなたを胸に抱きよせて、
「御覽よ、パパは笑つてらつしやるよ」と仰言つた。
パパは
「やアい、こわつぱ、パパは串談でやつてるんだよ」
母様は、ほほゑみながら、しかもほこりがに、あなたの涙を拭つておやりになつた。あなたは、あなたの方へ手を差出して居るパパを、いぶかしげに

見やつた。そして母樣に押されながら、おづおづとパパのところへ行つた。

パパは仰言つた。

「お前はいつでも今のやうに母樣に盡さなければなりません。そしてパパが居ない時には、誰でも他處の人に、母樣がいぢめられないやうにするんですよ」

母樣はあなたの額にキッスして、

「母樣を護る軍人なんだもの―」

そしてこれからのちは、あなたが近くに居る時には、母樣に心配はなかつた。

「ああ、あの荒木の奧さん、あれにはまた弱つて仕舞ふねえ」

と母樣は低い聲で仰言つたけれど、あなたはそれをきき逃さなかつた。そ

して小さい全精神をあげて荒木夫人を憎んだ。つひにその奧さんの勘定日が來て、奧さん自身やつて來た。母樣は庭に居て聞きつけなかつた。あなたは自分で挨拶に出た。

「母樣には、今日は、逢へやしないよ」あなたがしやちこばつていふと

「それは變ですねえ」と荒木夫人は一足進んで言つた。

「駄目だい」あなたは力一杯にドアにつかまつて、聲を張りあげた。

「駄目だよ。這入つちやいけないよ」

「おせつかいだつちやありやしない」荒木夫人は、威しつけるやうにいつたけれど、あなたは、めげずに睨めつけて、聲を張りあげ、

「もう、僕の母樣にや逢へやしないよ」

と斷乎して繰りかへした。

「何故ですか？　承りたいものですが」と荒木夫人はみるみるふくれあがつた。

「いつたい如何してなのです？　それを聞きませう」

「何故つて、父様がゐない時には母様の面倒を坊やが見てあげるんだい。母様が逢ひたくないやうな奴に母様がいぢめられないやうにしろつて父様が言つたんだもの」

文句が長かつたので、一息でいつてしまふのは大抵の事ではなかつた。

荒木夫人は干からびたやうな嘲笑を洩して

「ああさういふんですか？　それでお前さんは、何故お前さんのお母様が私に逢ひたくないのか、その譯を知つてゐなさるかえ？」

「だつて――母様、さう言つたもの！」

あなたの言つたことはきれぎれで恰度「いろは」の御本を讀むやうだつたので、荒木夫人は呑込めなかつたかもしれなかつた。

しかし、兎に角、うまく行つた。荒木夫人は火のやうに怒つて、鼻息を荒くしながら、裾を蹴返して歸つて行つた。

「もう決して決して」といつて、門の戸をピシヤリと閉めた。

あなたは靜かにドアをしめた。

戰は勝てり！

あなたは庭へ引返した。

「もう濟んだ、もう濟んぢやつた。」

「何がもう濟んだつての、坊や」

「荒木の奥さん」とあなたは答へた。

こんな風にあなたは母樣に盡した。母樣はますますあなたを可愛がり、あなたもますます母樣に盡したのでした。この日頃あなたは病氣ではあつたものの、なほ且機嫌がよかつた。何故つて母樣がおいしい物を拵へては、お茶碗に散蓮華を添へて持つて來て下さるたんびに、お代りのいるほど食べた——死なないつて證據のやうに。さうしては柔かい枕をして母樣が手づから拵へたツギハギの丹前を掛けて横になつた。枕もとには母樣が嫁入の時に着たキモノの絹の小さなキレや、母樣がずつと昔、まだ桃割を結つてた時分の、他處行のお羽織の紺青色のキレがあつた。まだまだお祖母さんのキモノの柔かい鼠色のキレや、春さんのものであつたピカピカ光る桃色のや、父樣が若かつた男盛りの頃のネクタイだつた條のあるのや、藍色のや黄色い

のもあつた。病に疲れてものうく、眠む氣がさして、うつとりとして來るにつれて、その嫁入衣裳のキレは冷い眞白な雪に變る。すると橇の鈴の音が聞えて來る。

隅つこの方に小さな教會のついて居るクリスマスカードが見える。その教會の塔は凍つて居たけれど、その窓はクリスマスの輝きで明るく暖かかつた。

つぎに紺青色のは空であつた。

そして、それを見て居ると、小鳥や、星や、三月彌生のことなどが思ひ出されるのであつた。

もしお祖母樣のものであつた鼠色のキレに眼を移すならば、綠色だつた空は忽ち暗くなつて雨が降つて來る。

けれどもお春さんのであつた桃色のキレや、父樣のだつた藍色ののや黄色のを見さへすれば、すぐに花が咲いた、お日樣がまた輝くのでした。やがていろんな色がごつちやになつて、こんがらかつてしまふ。蒲公英がちやらちやらと鳴つたり、橇の鈴や菫が雪のなかで花を開いたり。そしてあなたは眠ります。その眠りが小さな子供を健康にするのでした。

2

春が來た。

櫻の枝には蜂と風とが音を立てて居る。庭にはあなたと母樣と二人きり

白い花瓣が雪のやうに音もなく散りかかる。

小鳥は朝の輝きのうちに囀つてゐた。

あなたは躍り、笑ひ、且歌つた。

あなたの大きくみひらいた眼には、果てなき大空の藍色と見渡す草原の綠とが映り紅を潮した頬には日の光と微風とが知られた。

「母樣見て御覽なさい、坊やが飛上りますよ」

「まあ」

「今度は逆立ち」

「まあ、お上手だこと」

「母樣、坊やは大きくなつてから何になるか知つてますよ」

「何になるの」

「曲馬師になるの」

「まあ」

「大きい白い馬に乗つて、ねえ母様」

「まあいゝことね」

「そしてお月様なんか飛越しつちまうんだ」

「お月様を、まあ」

「ええお月様を、見て御覧なさい」と言つてあなたはそとにあつた熊手の柄を飛越えた。

それがお月様を飛越す下稽古でした。

「けども坊やは曲馬師にはならないかも知れないの、きつと、ねえ母様」

「曲馬師にならないつて」

「ぼくは、ジョーヂ、ワシントンのやうに大統領になるの、父様がなれるつていひましたもの、なれるでせうか、え、母様」

「さうね、なれましようよ、何時か」

「だけども次郎坊なんかなれやしませんね、母様」

「何故次郎さんはなれないの」

「だつて次郎坊は約束してもすぐ嘘いふんだもの。ぼくは言はないの、ジョーヂ、ワシントンも言はなかつたから」

「さうさうその方がいいんですよ、曲馬師と大統領とはまるで較べものになりません」

「ぼくは母様、ぼくはきつと大統領になりますよ」

「まあいいこと、屹度なるんですよ」

母様は離れで縫物を始めなさる。

「母様」

「はあい」
「今から歌を歌ひますよ」
ほどよい庭へ眞直に立ち、踵を揃へ兩手を眞直に垂れて「氣を付け」の姿勢であなたは歌ひはじめた。

天はゆるさじ良民の
自由をなみする虐政を
十三州の血はほとばしり

「もう少し靜かにお歌ひなさいな」と母樣が仰言つた。

天はゆるさじ良民の……

「それぢあ聞えやしないわ」と母樣はお笑ひになつた。あなたはちよつと、妙な笑ひかたをしてまた聲を張りあげる。

自由をなみする虐政を
十三州の血はほとばしり
ここに立ちたるワシントン

「まあお上手だねえ」と母樣は仰言る。
「さあ今度は母樣の番だよ。母樣何かお噺」
「お噺」
「ええあの菫のお噺」
「菫の」といつて母樣は、夢見るやうに針の手をとめて、
「青い青い菫が――」
「空のやうに青いのねえ、母樣」とあなたは口を入れた。
「空のやうに青い、さう昔はね、この世界に菫が一つも無かつたの」

「それからお星様もねえ、母様」

「ええ菫もお星様もこの世界になかつたの。そこでねえ坊や、青い空をすこしばかり分けて貰つてそれを世界中に輝したものがあるの。それが菫の一番はじまりなんだよ」

「それからお星様は？」

「坊やは知つてるぢやありませんか。お星様はね、青い空の小さな穴ですよ、そこから天の光が輝く小さな穴ですよ」

「ほんとう、母様」とあなたは言つて母様を見あげる。

母様の眼は菫のやうに青く、星の様に輝いて居た。天の光が輝いて居つたから。

母様は世界中で一番不思議な人であつた。

母様は嘗て悪い事をしたことがなかつた。そしていろんな事を知つて居た。夜も晝も子供のことを見ておいでなさる神様をも知つて居た。また神様はあなたの髪の毛の數さへも知つておいでなさるのみならず、小鳥が死ぬのをも一羽だつても、神様の知つて居なさらぬことはないと母様は話してきかせなされた。

「そんならねえ母様、神様は、あの駒鳥の死んだ時をも知つてゐるの？」

「知つてなさるとも」

「それぢやあ、ぼくが指を傷めた時をも、知つてゐるの？」

「ああ、何でも知つてゐなさいますよ」

「そんなら、ぼくが指を傷めた時には、可愛さうと思つたでせうか、え母様」

「それは可愛さうだと思ひなされたともね」

「ぢや、何故神樣はぼくの指を傷める樣になされたの？」

暫く母樣は默つておいでだつた。

「まあ坊やは、それは母樣には解らないわ。神樣より外には誰も知らない事が澤山あるのです」

あなたは母樣の言葉をあやしみながら、母樣の膝のうへに抱かれて居た。

空のどこかに、雲のうへの輝き渡る大きなお宮の中に、金の冠を戴いた神樣がいらつしやることをあなたは知つて居た。そしてその下の綠の世界には、小鳥が死んだり、小さな子供が指を傷めて、母樣に抱かれて泣いたりするのです。

神樣はすべての事、すべての人を視ていらつしやつた。けれどもそれを助けはなさらなかつた。

あなたは、母樣の頸に兩手をまはして母樣の胸に噛りついた。

「母樣！　ぼく神樣はいや、神樣はいや！」

「何故坊やはそんな事いふの？　神樣は坊やを可愛がつてらつしやるのに」

「だつて、だつて、母樣、母樣がなさる樣ぢやないもの、神樣は母樣のやうぢやないんだもの」

蜂と風とは林檎の枝に音を立てて居た。もう五月になつたのだ。庭にはあなたと母樣とただ二人、眞白な花びらが雪のやうに亂れて散る。あなたはお祖父樣が拵へて下すつたブランコに乘つた。

青葉の影はそよ風につれて搖れる。あなたの心はあなたの夢みるままに搖れた。

風は林檎の枝に歌ひ、花のたわわな枝は風に搖れ、風に撓つた。
あなたの頭上はすべてこれ空飛ぶ鳥と、鳥の歌。あなたの周圍はすべてこれ、風に光る草の原であつた。

あなたはブランコが搖れるままに、何時かしら、藍色のキモノに身を包んで藍色の大海原を帆走る一個の船夫であつた。

風は帆綱に鳴り、白帆は十分風を孕んだ。船は閃く飛沫を飛ばして駛せた。鷗は鳴いて大空に輪を描いた。さうしてあなたは、海の風に髪をなぶらせつつ、何處までもと、ひた駛せに駛せた。

船は錨を下した。

動搖は止んだ。

あなたはもとの子供であつた。

「母樣」

と夢心地であなたは靜かに言つた。聲はまだ眠さうだつた。母樣は聞きつけなかつた。母樣はやはり離れで笑ひながら坐つておいでなされた。針の手は鈍つて縫物が膝からすべり落ちさうであつた。

あなたの母樣は世界で一番優しい人、あなたはその母樣の秘藏つ子であつたことを、今こそ知つては居るものの、あなたはその時まだそれを知らなかつた。

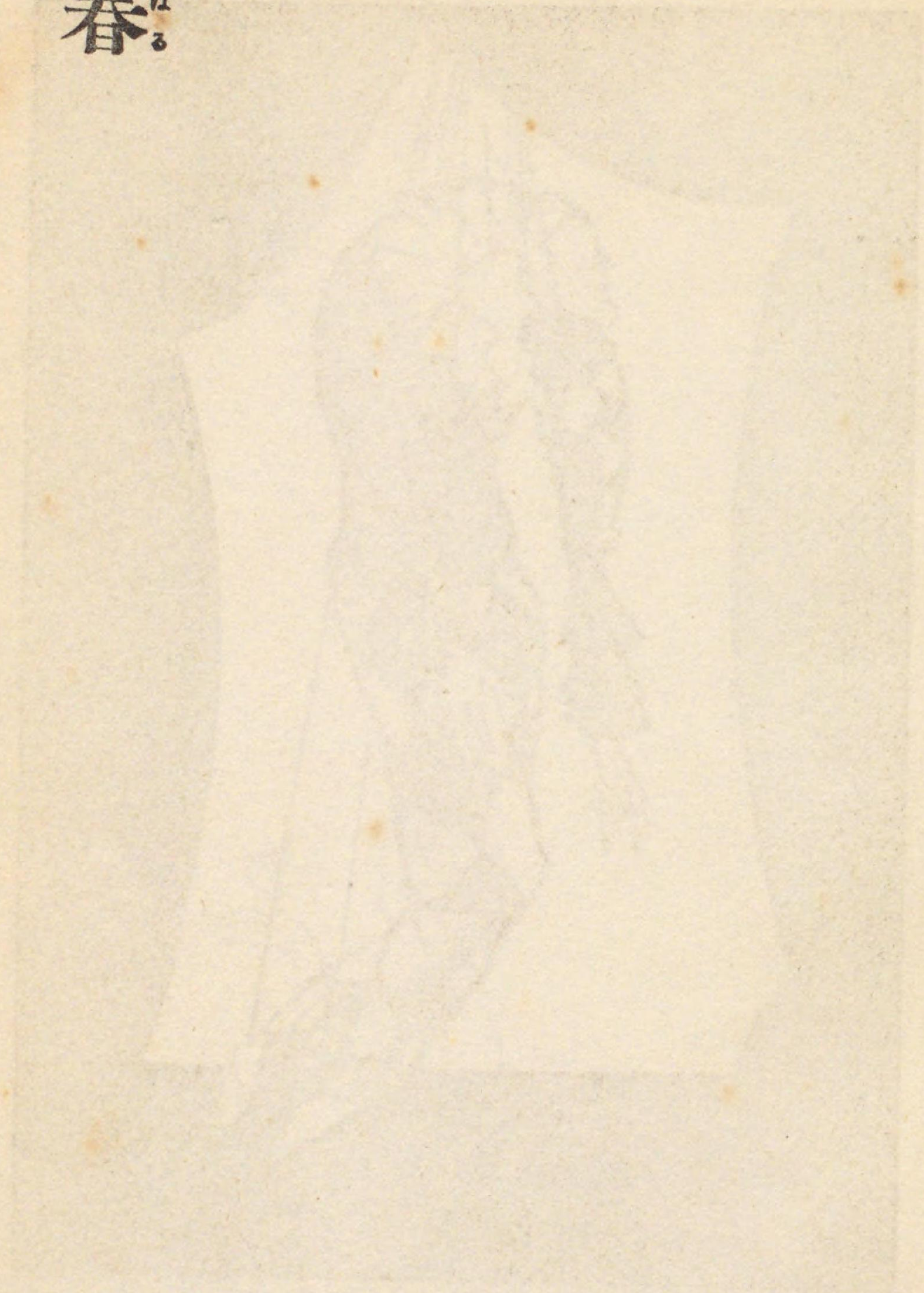
母樣の庭で、母樣の膝の上で、母樣の手に抱かれて、母樣の頰にあなたは兩手をあてながら、母樣の眼の藍色の床しさをあやしみつつ見詰めた。そして情あふれる母樣の聲を嬉しくきいた。

「可愛いい坊や」

「え」
「私の大切な大切な可愛いい坊や」
といつて母様はあなたを胸に抱きよせて、頰ずりをなさる。
「何日かねえ、このお庭で、この離れで母様は坊やの夢を見たのよ」
「坊やの夢を？　えツ母様」
「あゝ坊やの。恰度この庭でね、そこの月見草が花盛りで鳥が鳴いて居たの。母様は、坊やが小さな赤ん坊だつたところを夢に見たの。ああ、その時に風は月見草の花に歌をうたつてきかせて居ましたよ。母様はねえ。坊やにねんねこ歌を歌つてきかせたのよ。さうするとねえ、坊やが私の方へ手を伸べて笑つたの、それから……ねえ、坊や……」
「でも母様、それは夢だつたの」

「それはほんとの夢だつたの、そしてそれがほんとうになつたの。それは六月のある晩にほんとうになつたの。——六月のおついたちに……」
「ぼくの誕生日に？」
「坊やの誕生日に」
息をもつがずあなたは言つた。
「母様、美しい夢ね」

春（はる）



春

時

ある春の晴れた朝

所

花咲ける丘

人物

少年　（十三歳位）

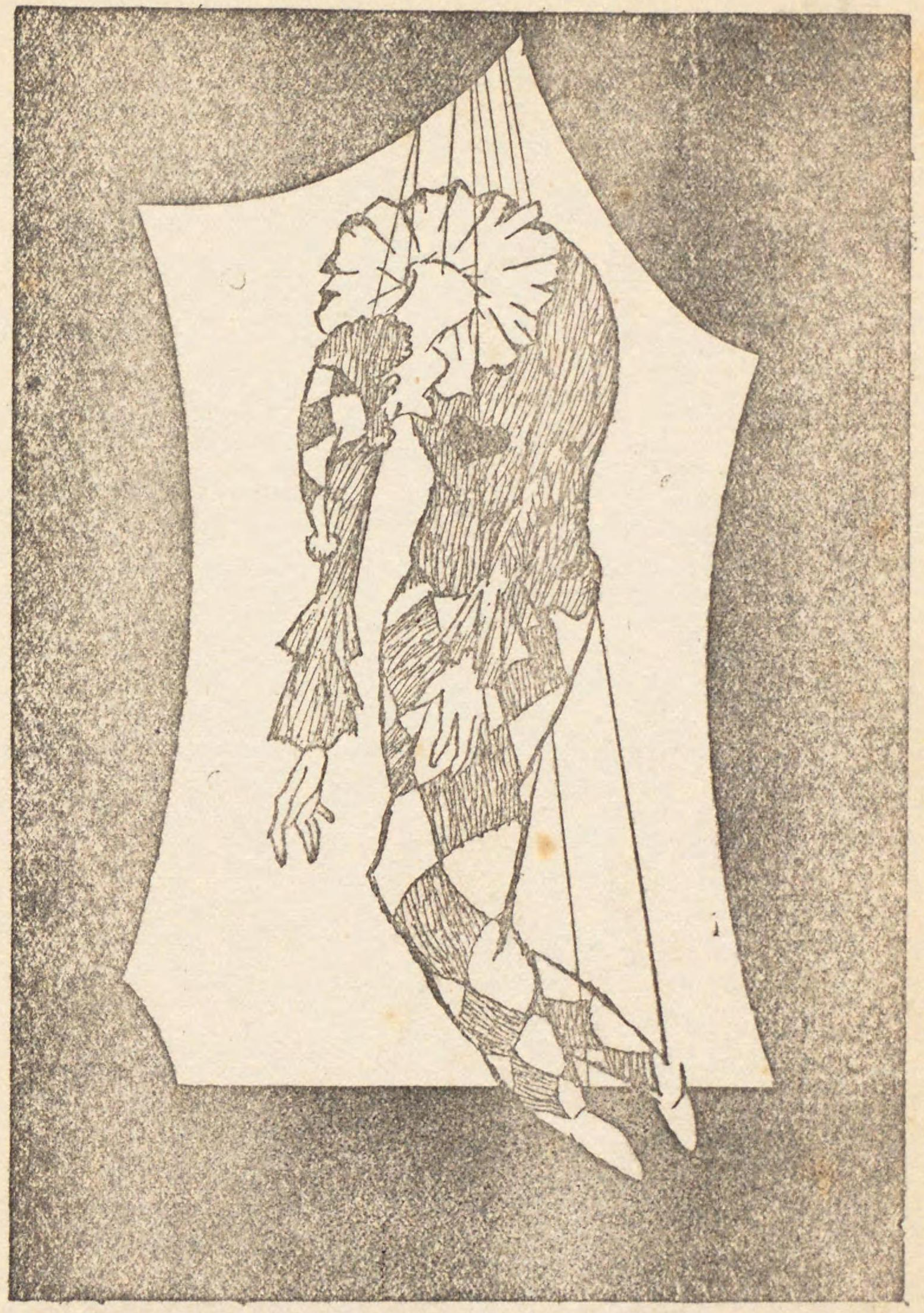
少女　（十一二歳）

先生　（小學教師）

獵人　（若き遊獵家）

兎　（十二三歳少女扮裝）

舞台は、櫻の花など咲いた野外が好ましいが、室内で裝置す



る場合には、綠色の布を額縁として劃り、地は、春の土を思はせるやうな、黃土色の布か、緋毛氈を敷きつめる。背景は、神經質な電氣の反射を避けるため、空も山も花も草も、それぞれの色の布を貼りつけたものを用ふ。すべて舞台の裝置も、演出も、神經的でなく、子供の本能と情操とが想像した、愛らしい朗かな春そのものの創造であること。

扮裝は、少年少女は平常着のままでも好い、その他は子供の空想の產物で好いが、先生は威嚴を損じない程度にのどかな人物であること、獵人はづんぐりしてゐて意氣なあはてもの、兎はフランネルのマスクを被る。

第一景

幕があくと、舞台裏から左の唱歌が、だんだん近づき、舞台下手から少年少女が歌ひながら登場。

さくら　さくら
やよひの　そらは
みわたす　かぎり
かすみか　くもか

少年少女が登場すると、舞台裏でもその唱歌を少し遲らせて、山彦の心持で歌ふ。

少女「おや！　兄さん、誰か山の向ふでも歌つてゐてよ」

少年「うそだよ、きつと夏ちやんの空耳だらう」

少年歌ひつづける。少女耳をすます。

にほひぞ　いづる
いざや　いざや
みに　ゆかむ

少女「いいえ兄さん、よく聞いて御覧なさい……ほらね」

少年「あゝ、ほんとだ、誰だらう」

少女「ね、兄さんもつと何か言つて御覧なさい」

さくら　さくら
やよひの　そらは

少年歌ひながら首を傾、舞台裏でも歌を眞似る。

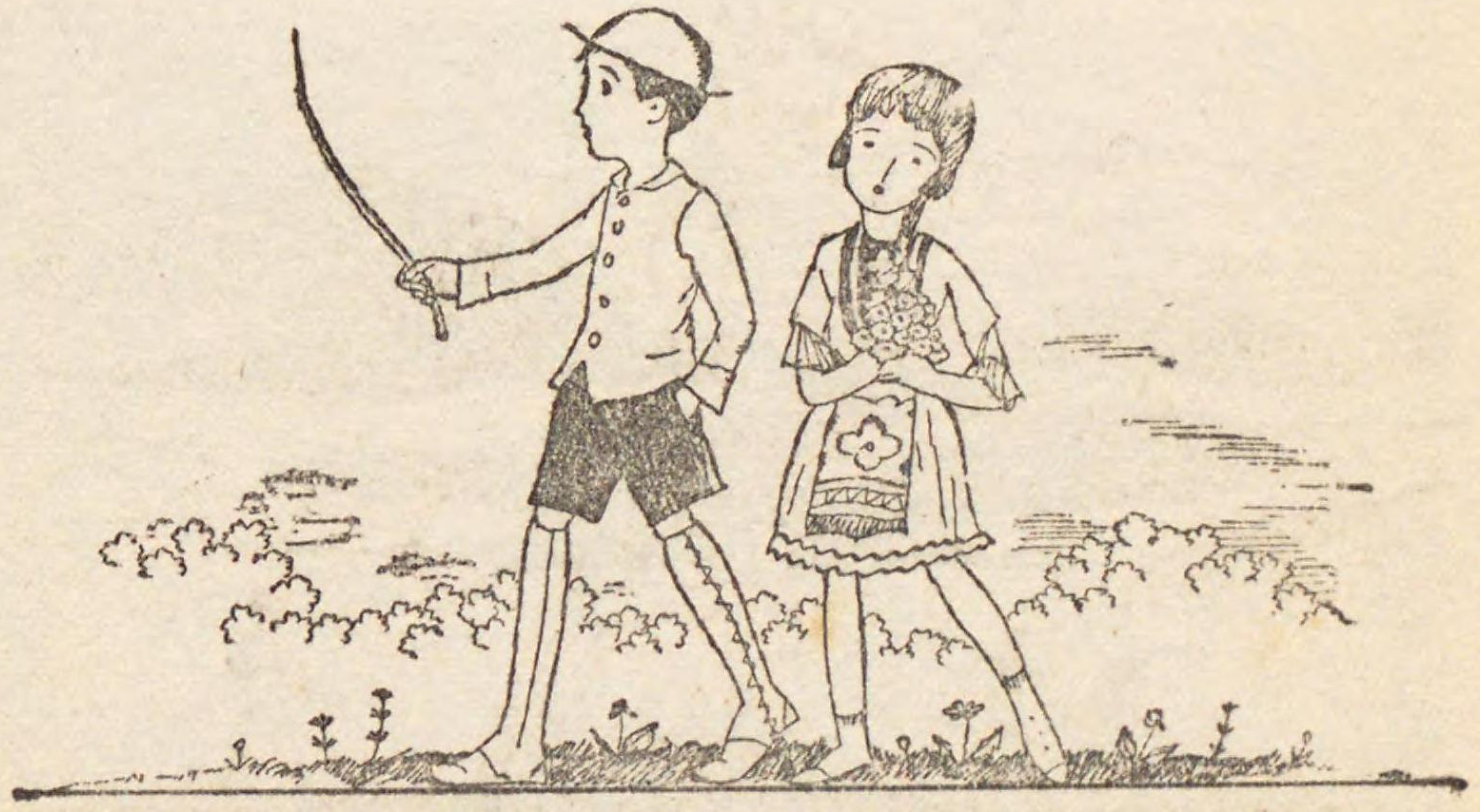
少年「誰だ！」

山彦「誰だ！」

少女おどおどと少年に寄添ふ。

少年「眞似をするのは誰だい」

山彦「眞似をするのは誰だい」
少女「兄さん、あたし怖くなつたわ」
少年「怖かあないよ。誰かきつと惡戯をしてゐるんだ」
　少年勇敢に力みながら
少年「人の眞似をするのは失敬だぞ！」
山彦「人の眞似をするのは失敬だぞ！」
少女「大丈夫兄さん？」
少年「大丈夫だよ」山に向ひ「馬鹿野郎」
山彦「馬鹿野郎」
少女「兄さん。向ふの人きつと怒つたのよ」
少年「さうかなあ」
　少年も怖氣づき、妹をかばふ。
　上手より吉野先生登場。
少女「あら先生よ」
少年「あ、吉野先生、こんちは」
先生「今日は」
少年「先生、先生は先刻、山の方で唱歌をお歌ひになりましたか」



先生「いや、歌ひませんぞ」
少年「でも先生、ぼくたちが唱歌を歌つてゐたら向ふの山でも唱歌を歌ひましたよ」
先生「なるほど」
少女「それからねえ先生、あんまり眞似をするからお兄さんが誰だつて仰言ると、向ふでも誰だつて言ひましてよ」
先生「なるほどね」
少年「あれは山の婆が歌つたんですか」
先生「ははは、それはね山のお婆さんでも神樣でもない。山彦といふものぢや」
少年「山彦がものを言ふんですか」
先生「さうぢや、こちらの聲が向ふの山へ響くと、向ふの山がそれを返してくるのぢや、だからこちらの言ふ通りに向ふでも答へるのだ」
少年「だから僕が馬鹿野郎つて言つたら向ふでも馬鹿野郎つて言ひましたよ」
先生「さうだらう。だからこちらで何かやさしい事を言つてやれば、向ふでもやさしい事を返してくるのぢや」

少年「おもしろいなあ」
少女「兄さん、何かやさしい事を言つて御覧なさい」
少年（山に向ひ）「こんちは、ごきげんいかがですか」
山彦「こんちは、ごきげんはいかがですか」
少年少女顔を見合せて笑ふ。
少年少女「あなたは好い方ですね」
山彦「あなたは好い方ですね」
先生「どうだね、山彦は正直だらう。どれ私は行から、仲よく遊んでおいで」
少年「先生、さよなら」
少女少年「さやうなら」
先生下手へ去る。

第二景

舞臺は前景のまま、少年は木の枝など振りて歩きまはる。少女摘草などする。

この時舞臺裏から左の歌が聞える。

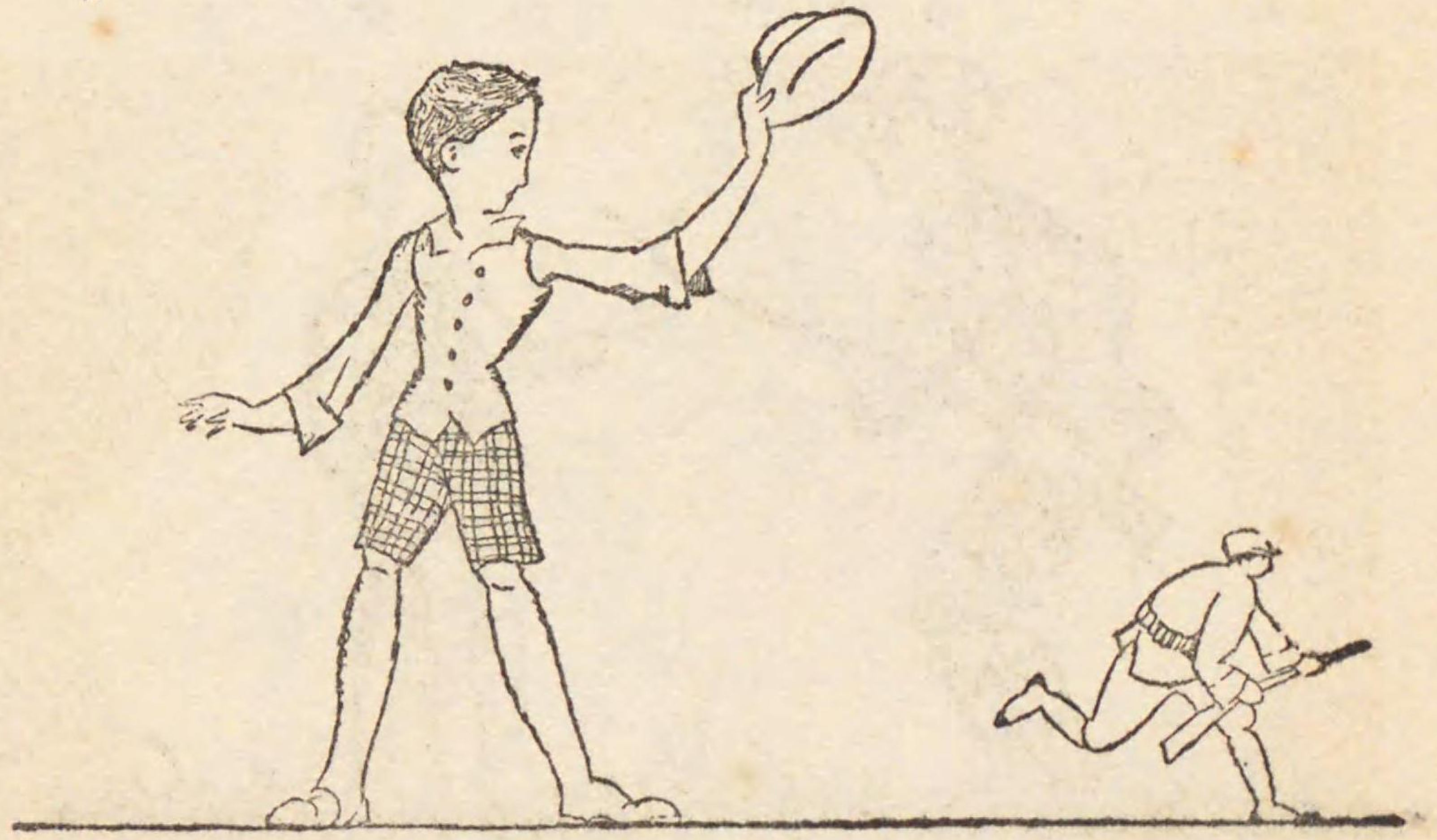
ころ　ころ　小山の　小兎は
なぜに　ころ　ころ　お泣きだえ
お母さんがないか
實がないか
お母さんは　そばに　ゐなさるし
木の實は　お山に　あるけれど
九十九人の獵人が
九十九谷をとりまいて
母子もろともねらわいな。

少年「山彦がまた歌ひ出したよ」
少女「さうね」（耳をすます）
歌が終ると、下手から一匹の兎が呼吸をきらしながら走つて出る。
兎「助けて下さい。怖い獵人がわたしを撃ちにくるんです」
少年「その獵人はどこにゐるの」
兎「あれあの坂をいま上つてます。もうぢきここへ來るでせう。どうぞわたしを助けて下さい。」
少女「まあ、可哀さうね。兄さんどうしたら好いでせう」
少年「よし、きつとぼくが助けてあげるよ」

兎「ほんとに、坊ちやんありがたう」
　獵人撃方の構へに銃を持つて、下手より急ぎ登場。
少女「あら兄さん」
少年「あ、來たな」鋭く少女に「はやく、かくして、かくして」
獵人「坊ちやん、兎を知りませんか」
少年「なんですか」
獵人「兎を知りませんか」
少年「知つてゐますよ、おぢさん」
　この對話の間に、少女は兎をほどよき叢にかくす。
獵人「たしかこの邊へ逃込んだがなあ」
　（獨語をしながら四邊を見廻す）
少年（獵人の注意を自分の方へ向けるやうにあせりながら）「おぢさん兎の毛は白いんでせう」
獵人「ああ、その白兎、白兎」
少年「耳が長いでせう、おぢさん」
獵人「さうさう耳が長いね」
　獵人、銃を杖にして話し出す。
少年「ね、おぢさん、兎の尻尾は短いでせう」

獵人「短いとも、これんばかりさ」
少年「それから、前脚が短くて、後脚が長いでせう」
獵人「短くつて、長くつて」獵人は、自分が何をしてゐるかを思出して「坊ちやん、ぼくはその兎を探してゐるのだよ」
少年「おぢさん、その兎はやつぱり赤い眼を持つてゐるでせう」
獵人「ぼくは、坊ちやんの博物の復習をしてゐるんぢやないよ。一體その兎は……」
少年「白兎ですね、おぢさん」
獵人「白兎ですよ。何遍それを言へば好いんだ。そんなこと言つてゐるうちに、氣の利いた兎は、穴の中へもぐつて晝寢をするだらう」獨語のやうに「この子は、よつぽど呑込のわるい子だな」
少年「なあんだ、おぢさんは、その白兎を撃ちにきたの」
獵人「さうさ」
少年「だつておぢさんは、いきなり兎を知らないかつて言ふんだもの、だからぼく、學校の復習をしちやつたのさ」
獵人「眼をぱちくりやつてゐる」

少年「ああ、その兎なの」
獵人「さうさ」
少年「その兎なら、もうよつぽど遠くへ逃げました。あの道の先の、ほら左側に赤松があるでせう」
獵人「あるある」
少女は獵人の方を見て笑つてゐる。兎も出て來て見てゐる。
少年「あすこを左へ曲つて、櫻の木が見えるでせう」
獵人「ああ、見えるね」
少年「あの木から、一本、二本、三本、四本、五本、六本、十三本目の櫻の下へかくれましたよ」
獵人「いや、どうもありがたう」
獵人はあたふたと、上手へ走つてゆく。
少年「おぢさん、早く走らないと、また兎が逃げますよ」
少年兎に近づきながら「萬歳、萬歳。兎さんもう出ても好いよ」
少女「ずゐぶん心配したわ」
兎「やれやれ、ほんとに危い所を助かりました。どうもありがたうございます。」



少女「よかつたわね」
少年「うまくいつたね」
少年を上手に、兎をまん中に、三人手をつなぎ舞臺の前へ進み。

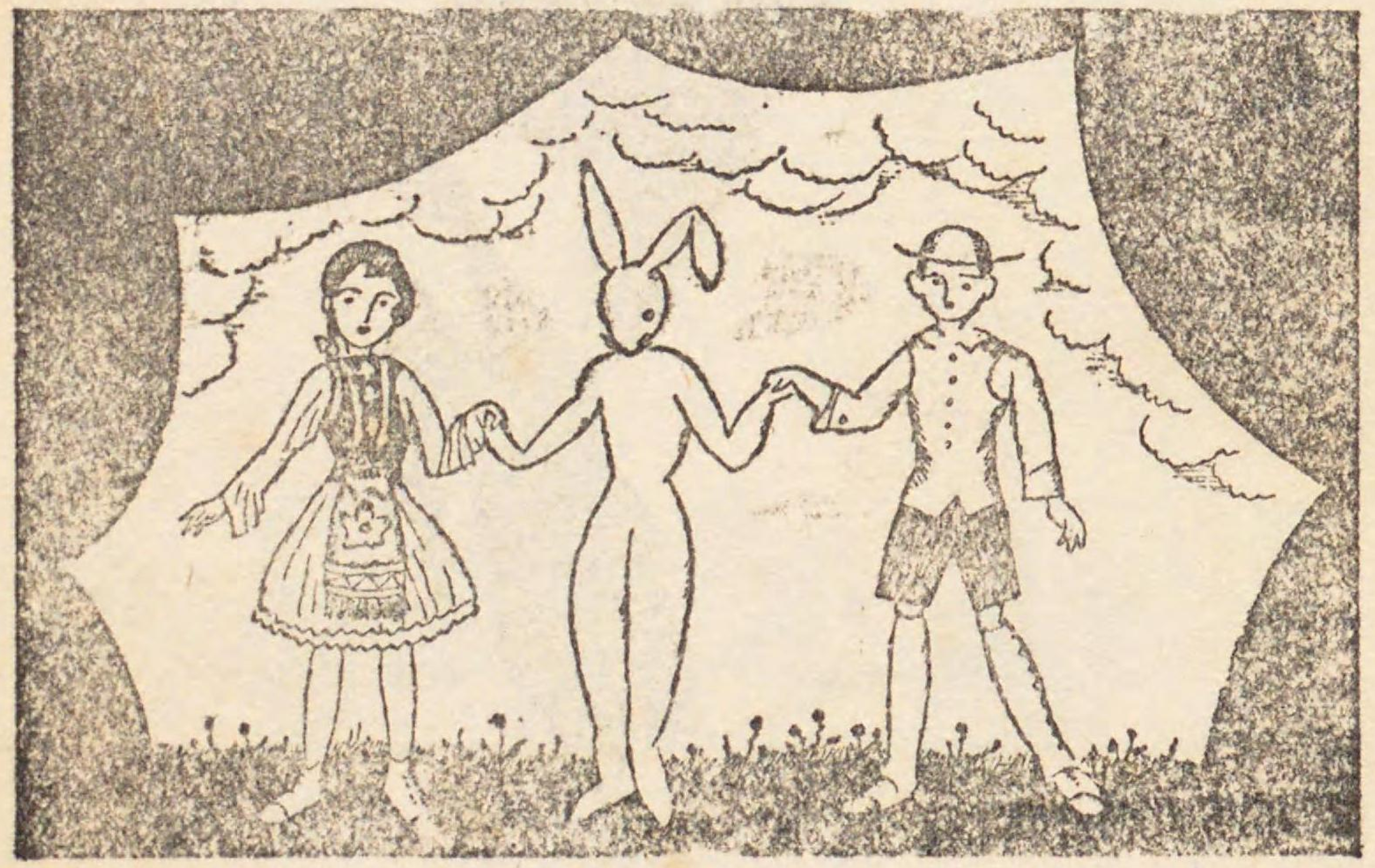
兎の挨拶

御見物のお嬢樣坊ちやまがた、わたしはまあ何と言つて皆樣にお禮を申して好いやら、あんまり嬉しくて、申上げる言葉も知りません。

これはみんな、この賢いお坊ちやまの勇氣と、親切なお嬢さまのお蔭です。けれどあの草むらの蔭にかくれてゐる時、皆樣はほんたうにうまくわたしをかばつて下さいました。もしも皆樣のうちの誰かが「兎はあそこにかくれてゐるよ」とでも仰言らうものなら、わたしはまあどうなつてゐたのでせう。お蔭樣でわたしはこれから懷しい親や兄たちの許へ歸つてまゐります。皆樣もどうか御機嫌よろし、、ではさようなら。

かすみか　くもか
はたゆきか……………舞臺裏の賑やかな合唱だんだん細りゆきながら

（幕）



春

目次

はしがき
都の眼……一
クリマスの贈物……一五
誰が・何時・何處で・何をした……二七
たどんの與太さん……四五
日輪草……五三
玩具の汽罐車……六一
風……七一
先生の顔……七五
大きな蝙蝠傘……八七

目次

大きな手……九三
最初の悲哀……一〇一
をさなき燈臺守……一〇五
街の子……一一三
博多人形……一二三
朝……一三一
夜……一三五
人形物語……一四一
少年……一四五
春……一七五

終

■春■

版權所有

大正十五年十二月廿二日印刷
大正十五年十二月廿五日發行

著作者　竹久夢二

東京市麹町區富士見町六丁目七番地
發行者　小酒井五一郎

東京市麹町區富士見町六丁目七番地
印刷者　小酒井五一郎

東京市麹町區飯田町六丁目一番地
印刷所　研究社印刷所

東京市麹町區富士見町六丁目七番地
發行所　研究社
電話四谷二九五五・三八二三番
振替口座東京二八六〇一番

(定價金壹圓五拾錢)

児乙部26-T-1
1200600483440